

FINDコマンドとX行コマンドを組み合わせた便利な使用法

タイトルに書いた2つのコマンドは、共にPFDのEDITのコマンドである。X行コマンドはあまりなじみがないと思うので、簡単に紹介する。X行コマンドは、通常一対のXX行コマンドとして使用され、この一対の行コマンドではさまれた行が画面上から消去される。注意したいのは、表示が消えるだけで、いつでも復活できるという点である。また FIND コマンドは、おなじみのコマンドであるが、このコマンドのXやNXというオペランドを使用したことのあるユーザはそれほど多くはないと思う。オペランドXは、X行コマンドで表示が消されている行だけを探索範囲とするものであり、逆にNXは、この範囲を対象としないというものである。どちらも指定しなければ、X行コマンドに関係なく、どちらも探索対象とする。

さて、これらのコマンドを応用した、いくつかの例を示そう。

◆大きなプログラムのCOMMON文や、サブルーチンの引数の対応をチェックする。

- ・まず、プログラムの先頭で行コマンドX9999を入力して、すべての表示を消す。
- ・次に、探索すべきCOMMON名やサブルーチン名を、FIND コマンドで探索する。実行の様子を図1に示す。

```

日本語EDIT --- AB3903.FK.FORT77 (FD6) - 01.02 ----- 最終行まで到達
コマンド ==>                                     移動量 ==> CUR
***** ***** データの先頭 *****V10L20*****
----- 32 行表示せず
003300      COMMON /INC/ PO,TO,DMSHI,DMSHJ
----- 18 行表示せず
005200      COMMON /INC/ PO,TO,DMSHI,DSMHJ
----- 111 行表示せず
016400      COMMON /INC/ PO,TO,DMSHI,DMSHJ
----- 193 行表示せず
035800      COMMON /INC/ PO,TO,DMSHI,DMSHJ
----- 237 行表示せず
059600      COMMON /INC/ PO,TO,DMSHI,DMSHJ
----- 329 行表示せず
092600      COMMON /INC/ PO,TO,DMSHI,DMSHJ
----- 238 行表示せず
***** ***** データの末尾 *****

```

図1 X行コマンドとFINDコマンドの組み合わせた使用例

- ◆ 幾つものサブルーチンを持つプログラムで、特定の変数に関する処理を調査する。
 - ・ まず、プログラムの先頭で行コマンド X9999 を入力して、すべての表示を消す。
 - ・ 次に、 F SUBROUTINE として、すべての SUBROUTINE 文を表示させる。
 - ・ この後で、特定の変数、例えば SPEC を FIND コマンドで、 F SPEC WORD のように探索すれば、変数 SPEC に対してどのサブルーチンで、どのような処理がなされたかを調査することができる。
- ◆ FIND コマンドの対象を特定の SUBROUTINE または MAIN 内のみに限る。
 - ・ 対象とすべき範囲を一对の XX 行コマンドで表示を消す。
 - ・ FIND コマンドに X オペランドを追加してやれば、表示の消えた範囲のみを探索対象にできる。
 - ・ あるいは、全く反対に、対象外の表示を消して、NX オペランドを追加してもよい。

【Y. N.】